

夢

息

中

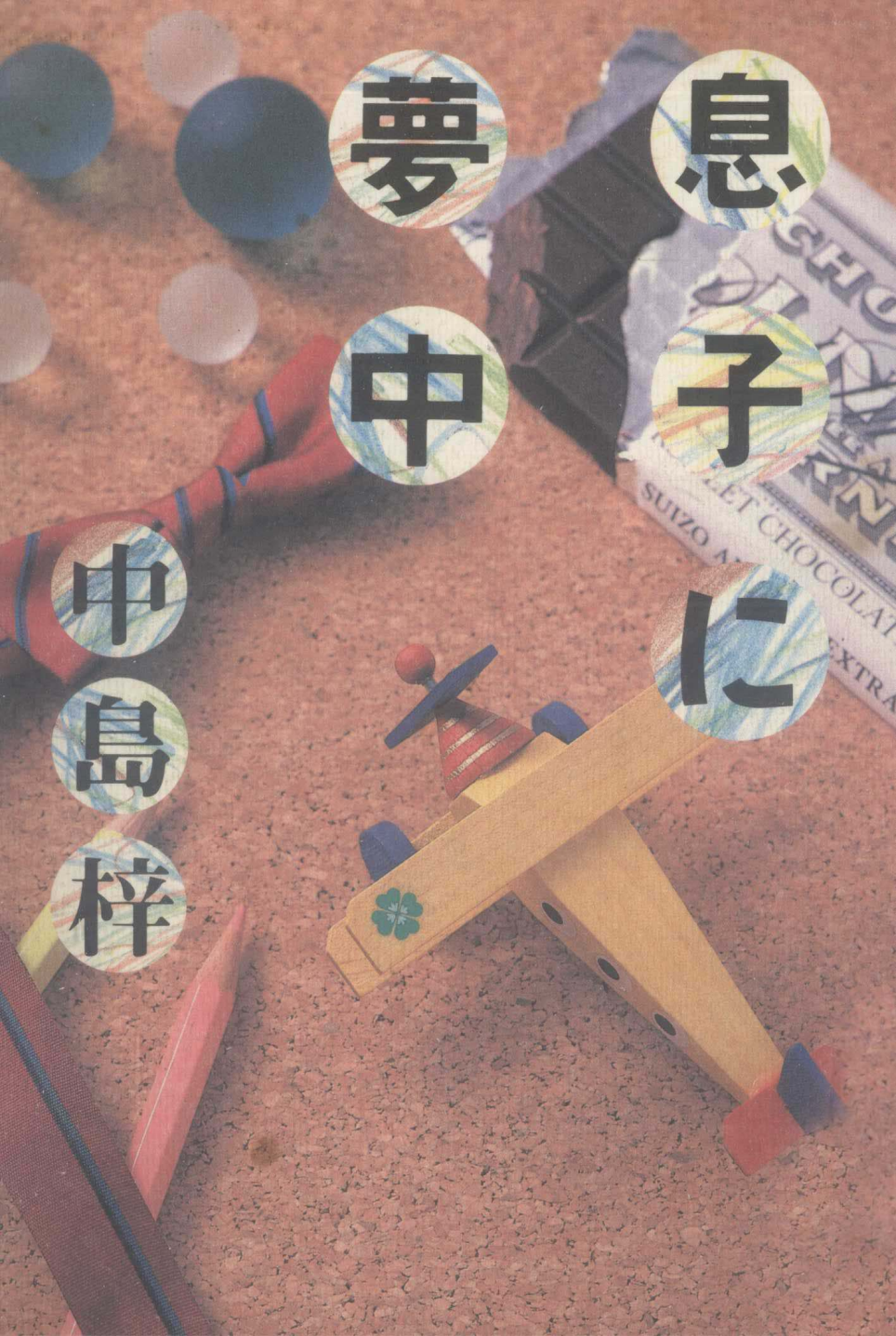
子

に

中

島

梓



息子に夢中

中島梓

息子に夢中

昭和六十年十二月五日初版発行

著 者 中 島 梓

発行者 角川春樹

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店



東京都千代田区富士見二一三—三

電話 営業〇三—二三八—八五二—

編集〇三—二三八—八四五—

振替東京三—九五二〇八—一〇二

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-883193-3 C0095

目次

息子よ

3

息子に夢中

25

再び息子へ、そしてすべての子供たちへ

239

ウルムチ行き

279

あとがき

314

挿 装 写 扉
画 丁 真 絵
お か 高 藤 今
か 橋 田 岡
べ り 義 大
り 雅 人 介

息子よ

1

遅ればせに、そして曲りなりにも「お母さん」の一人になってから、いつのまにか半年がたってしまった。

この半年というものは、本当に、空前にして絶後といたいくらいの半年でありました——とはいうものの、考えてみると、いつも、いつも、私はそう言いながら、びっくり眼で、よろよると、どうにかこうにか生きてきたのだ。いつでも空前絶後のことばかり——なんてめまぐるしく、ジェットコースターみたいにかけのぼり、谷底へ急降下し、いつも目をまわしながら生きているんだろう、私は。

少しでも、他の人と同じようだったのは、ほんとに小さいころだけだったような気がする。中学生になったらもう主観的には超波乱万丈だったな。マンガ家になりたかったり、自閉症になりかけたり。しかしそれでも大学を出るまでは、まだひとなみだった。

このお祭りさわぎがはじまったのは、やっぱり、評論の賞をもらった二十四のとき以来だった。インタビューと締切と人にあうことに埋めつくされた一年。疾風怒濤——と思っ

た。一日に七つ、別の用をこなしたりして。

しかし一年たって、小説を発表しはじめたとき、これまでのさわぎなんて、ただのからさわぎ、とうてい疾風怒濤なんてものじゃなかった、と思った。でも、その一年後、妻子ある男と恋をしたときも同じことを思った。

ところがそのさらに一年後に、それがスキヤンダルになって、芸能週刊誌に追っかけられるハメになったときにも、その男の人が離婚をしたときにも、そのまた一年後に新聞の社会面トップ（なんで私なんかがそういうことになるんだろう）で差別語問題にひっかったことを出されたときにも、まるつきり、同じことを思っていたのだ。

そうしてそのたびに、私は思っていたような気がする。とにかく、こんなにしんどい大変なことは空前絶後で、これまでのどのさわぎも、これにくらべりゃ目じゃないけど、それでもとにかくそれだけ空前だつてことは、絶後だということ、この大波を何とかしてのりきりさえすればきつとラクになるんだ、と。いつも、どのときも、私は、そう思つてよたよたとしだいに大きくなる津波あいてにサーフィンをやっていた。

ところが、ちつとも絶後になりやしない。結婚したら、かえって、しんどくなった。まるつきりちがう生活に馴れる^なという意味では、作家になったときと同じだったのだから。そして、それによく馴れたころ、妊娠である。

それでも、妊婦をしていたときは、からだの具合や精神状態がいつもとちがうことを除

いては、むしろこの七年のなかで、いちばん静かだったといえた。人にも会わず、人前に出るしごともしやめ、家で小説を書いては昼寝していた。

そうして、大介が生まれたのだ。

この六か月、過ぎてしまうとたった半年、でもその一か月一か月をいつたいどうやってのりこえてきたのだから、なんだか、いまとなつてはまるきり覚えていない。大介の生まれたときのことと同じように、ひとごとみたいに、ようやくたもんだと思ひ、それにしてもいまの私にはとてもできたもんじゃない、と思うのだ。もつとも、それをやってきたのは、たしかに、まちがいなく、私なんだけれども。

ひとつ、一か月をかさねて楽になることがあると、必ず、ふたつその分大変になることがふえた。少しずつ赤ん坊の扱いに馴れてくると、実家からかえって一人で何もかもやらなくてはならなくなったり、からだがやつと復調してくると、だんだんせがれが大人しく寝ているだけではなくなったり。それでも、五か月に入つたあたりから、ラクになったというより、大変なことに馴れてしまった、という感じがある。

せがれのほうも、何となく、私にとって、何やらえたいのしれぬお荷物、こわれものの、不安をそその、手のかかる人形から、いまのところはいろいろハンデがあつて、私が面倒をみてやらなくてはならないけれども、それでも一人前の私の相棒、いっしょにくらし、喜怒哀楽と感情生活と向うの都合のあるいっちょ前の小さな人間へと、少しずつ、変化を

とげてきた。食べものの好ききらいも言いおるし、私の都合につきあわされてブブーいうときも、私が彼にふりまわされて溜息ためいきをつくときもある。つまりは、互いに気がころが知れてきたのだ。

私はやっぱり、あまりにもえたいのしれぬあいてと暮らすのには耐えられそうもない。ハンデや都合ごと、気どころが知れてくるにつれて、やっとこれでまた波の頂点はこえたのかな（それとも谷底はすぎたのか）という実感がある。もっとも、私の場合、そういうぐあいにほっと息をつく、次の瞬間たいてい、それがもつとでかい次の大波のはじまりにほかならなかったことに気づくんですけどね。それでもやっぱり、いまはささやかな「ちよつとひと息」なんだ。戦士の休息、なのだ。大袈裟おおげさだと思うかな？ でもやはりそれが実感ですよ。これまでは、（むろん出産前後のおよそ三週間は別として）この五か月、大体ひと月に長編一本というペースでのんびり（！）書いてきたけれども、今月から来月にかけて本格的戦線復帰で、十二月から連載が五本になるんだから。さすが一日五十枚を誇った小生も、この数か月は、半減して一日二、三十枚におちていた。そのままで、書きおろしのシリーズ二本と単発ものいくつかをかかえ、連載五本に突入する来月を迎えて、どういうことになるのか、神のみぞ知る、だよ、まったく。お袋は、這い這いははいをはじめれば目が離せないし、歩きはじめたら仕事どころじゃないよ（おふざけでない。仕事どころじゃないどころじゃないのだ。締切は待っちゃくれないよ）と脅かすし。アーメン。

しかしそれにしてもこの半年、どうやって生きながらえてきたのだろう。

人間てほんとにどんな状況にでも何とか適応できるものなのだ。私の正体を知るかぎりの人はことごとく、私が子供を生むなんて狂気のサタだ、と言った。なかんずく反対したのは亭主であった。彼は私を知っているぶん、強力な自信をもって、私のもてるすべての性格、志向、性情、そのすべてに、「子供」という存在はまっとうから対立するのだ、と断言した（困ったことに彼の方は親の経験者なのです）——彼の論点はひとことかというと、私が（実年齢にはかかわりなく）子供だからムリだ、というのでした。

子供かどうかは知らないが、私は小説バカである。役者バカ、役者子供、というでしょう。あのたぐい、小説と字を書くことのほかは、ほぼ何もできない。ほぼ、というのは、料理と編物と若干の特技、楽器をいじるとか絵をかくとかを除いて、ということですが。

彼は言うのであった。子供、ことに赤ん坊なんてものは、とにかく、百パーセント理不尽なもので、理屈にあわないもので、わけのわからないもので、ところが私はそういう理不尽さ、こつちが何しようとお構いなし、という暴虐にいちばん弱いんだから、と。

さらに、それでも私は小説を書かずにはいられないだろうし、しかも、困ったことに、

私は完璧主義である。妙なところがひどく癪性で、たとえば、私は小説を書くのに、百枚といわれたら百枚めのラストの行のさいごのマスでおわる。私の長編は、原則として一章百枚の四百枚、あるいは五百枚である。四百一でも、四百九十三でもなく、正真正銘の四百、五百枚でなくてはならない。でないと気持ちがわるくていたたまれない。別にそうなるよう字数を調節しているわけじゃないのに、書きあがるとジャスト四百になってしまっている。この妙な性癖が、はじめの年に、私の結婚生活を困難なものにした最大の理由であった。

たとえばタオルが曲ってかかっているとか机の上の花瓶の場所とか、そういうことに、異常にカンを立てる人間で私があるからである。それにひとのことば使いとか、コーヒーを出したのに「どうも」ひとこと言わないとか、仕事中に平気で電話してくるとか。

結婚の少し前からその一年後くらいまで、私のそういう癪性はつりの放題で、たぶん、結婚しなかったら、疑いもなく私はさいごにはブルーストか、(失礼ですが——でもわるい意味じゃない、むしろ賞讃をこめて)森茉莉さんのようなタイプの作家(書くものこととでなく)になっていたと思う。自分の世界と自分の美意識の檻に自らをとじこめて、世界からかけはなれた仙人か、自閉症の少年のように、好きなものだけ満たした小さなコルクの部屋にとじこもって。

結婚したことで、そういう、自分ひとりの殻にとじこもることからは、私はひきはなさ

れた。何はともあれ、結婚というものは、もうひとりの人間とくらすことだったから。ところが、私の結婚したあいては、私を檻の中に自らとじこめることこそさせなかったが、そのかわり、自分が私の殻になってやろうと思う人間であった。つまり、私が、できること以外何もしないでも生きてゆかれるようにしよう、いやな目にあったり、苦手なことをせねばならなくなったりしては可哀想だ、それは自分がかわりにのこらずうけとめてやろう、という人だったのである。

つまりいまはやりのシンデレラ・コンプレックス、彼の場合は、だから逆シンデレラ・コンプレックスかもしれないが、私が小説を書くことは除いて自立しないために、全力をつくして私を甘やかしてくれたわけである。

これは正直いって私のようにもともとその性向のある人間にはたいへん危険なことであって、その証拠に、たちまちのうちに私はすっかり社会に適應するための努力をやめて、仕事をしているうちに少しはできてきたうすい殻もつけてしまったカタツムリの子どもに戻ってしまった。人間恐怖症になり、道を歩いていても、ひとと目があうことさえ耐えられないようになってしまったのだ。

しかし、一方では、私は真正正銘の二重人格であって、小説を書くことに関する限り、いかなる困難をも辞さぬ人間である。むしろ不可能にみえることを挑まれれば挑まれるほど、力を出すことができる。それにひきずられて、一人五人全集などというものもやった

し、二週間で四百枚の長編一本書きあげたし、こんどはまた一誌に二本同時連載などというばかなこともはじめてしまった。知らない人と話ができず、一人で外を歩けない自分と、不可能を可能にすることだけに生き甲斐を感じる果敢な戦士である自分——この二つの自分に両側から引っぱられて、混乱し、錯乱し、息もたえだえになっている——それが、子どものできる直前の私だったのである。

3

私は、もともと、決して子ども好きというタイプの女ではない。

昔は子ども嫌いをもって認じていたが、厳密にいうとそうでもなく、要は、私は、子どもがこわいのであった。

子どもというものは、何をしでかすかわからない。目があうといきなり赤んべえをしたり、人見知りしてわーっと泣き出したり、おんぶされている赤ん坊でも、いきなりこっちへ手をのばして来たりする。子どもの悪意も好意も、ともに私にはえたいが知れず、むき出しで、唐突で、それが怖ろしくてたまらなかった。よちよち歩き、子どもの自転車、小学生、みなそれぞれに何をしでかすかわからぬ感じがする。というのも、私もどうもいくぶん足もとのあやしい人間で、歩き下手、というのか、いつもよちよちしていた。坂道だ

ったりすると、手当りしだいに連れの腕にしがみついてしまうという誤解されやすい性癖も有していた。

であるから、よちよち歩きの子どもや三輪車、自転車、うしろを向いてふざけながらかけてくる小学生などは、私にとつては無性に怖い。ことに自転車はいまでも怖い。うまくよけられないし、向うもよけてくれるかどうか信じられないからだ。

私の母親などは赤ん坊が好きで、電車の中でも赤ん坊がいるとすぐあやしている。それがふしぎでたまらなかった。私などは、レストランで赤ん坊が泣き出したりすると顔面蒼白^{はく}になり、となりの席に赤ちゃん連れが来ると、何だか何かかされそうな気がして硬直する、という始末だった。よだれとか、ミルクとか、汚れた手でさわるとか、何かそういうことがあるんじゃないかという強迫観念のとりこだったのだ。あのころの私は、知らない人——というよりも私が個人的によく知っていて好感をもっている人間以外の全世界、車も人も犬も猫も子供も、すべてを信じていなかった。近よれば必ず攻撃されるのではないかとぴりぴりして身構えていた。なでようとしてのばされる手を叩^{たた}かれると思って、急いで逃げてゆくネコみたいだったのだ。やっぱり、私の結婚あいてが、私が母親になるなんてとうていムリだと思ったところでふしぎはなかったらう。

子どもが生まれてから、その被害妄想と強迫観念がうそのように、ころりと私は大の子ども好き、赤ちゃん好きになり、人とも世界ともうまくゆくようになった——といったら、

まるでお伽話^{とぎばなし}だし、それではあんまり調子がよすぎるといふものである。胸に手をあてて反省してみるけれども、やっぱり、どうとりつくろつても、私はまだ、子ども好き、という^{うたい}たちではない。

どういふものか、子どもが生まれてから、赤ん坊や子どもの見わけはつくようになった。つまり、はじめはひとしなみに小さな怪物にみえていた子どもたちに、大人と同じようにかわい^{かわ}い、かわいくないの別がいろいろあることがはじめてわかった。CMに出るような子どもや赤ん坊は、あれはやっぱりとびきりかわいい子なのである。世の中の八十パーセントの子は、必ずしもかわい^{かわ}いというわけではない。それはそうだ——世のおとなの何パーセントが、どのぐらいととのつた目鼻立ちをしているか、考えてみれば、子どもはみんな天使のよう^{よう}にかわい^{かわ}いなんてことがありえないくらい、すぐわかる。頭や性格だつてそう^うだ。すべての子が無限の可能性を秘めているとか、天使のように清らかな心だとか、考えるから話がややこしくなるのだ。

私は人間の平等なんて信^しじない。人間くらい、すべてに格差をつけられ、等級をつけられて生まれてくるものはない。子どもだけが、その不条理をまぬかれていて、ある日突然大人の世界の偏差値をくつつけられる、などという^うことが、あろうはずもなかったのだ。

「子ども」が好き、嫌いではなくて、子どもの中に好きな子と嫌いな子がいるのだ、とわかつてから、私は急にラクになった。「天使」と「怪物」の十把ひとからげの妄想から